三浦大介の智謀――藍澤南城の「紀事」――

村山敬三

一　序

越後柏崎の儒者、藍澤南城（一七九二～一八六〇）に「紀事」と題する漢文小説がある。南城の詩文集である『三餘集』巻四に収められていて、題名の下に「南城野史祗　艸」とある。[1] 冒頭には、「治承四年八月、畠山次郎重忠、河越太郎重頼、甲三千を帥ゐて、三浦氏を衣笠に攻む。城主大介義明之に死す。」と記されている。これはこの話の結末を端的に記したものである。そのあと本文は一字下げられて全體が記されている。紀事とは事實の經過を記す意であり、また南城野史と記されていることからすれば、南城としては、史書をもとに個人として事件の經過を記したという意識なのかもしれない。しかし、この話は個性を持った複數の人物によって物語が進行し、最後に至って全體が完結している。だからこれは、やはり南城が日本の軍記物に取材しまとめた漢文小説だと言えるだろう。軍記物の漢語譯という側面も考えることができるが、それは本文がどの程度テキストに沿って忠實に書かれているかという問題も關わってくることである。

『三餘集』の中には漢文小説が何編かあるが、ほかにも南城には『啜茗談柄』(2)の著作がある。これは茶を啜る時の話題というほどの意味で附けられた題名であるが、内容は越後各地の奇談を中心とした短編集である。そうした南城の漢文小説の状況については、既に内山知也氏に「藍澤南城の漢文小説」があり、(3)詳しい解説がなされている。だが、そこでは「紀事」は取り上げられていない。「紀事」とはどのような作品なのか。南城は何をテキストにして、この話をどのようにまとめているのか。執筆の背景や作品の主題についても考えてみたい。

二　「紀事」の梗概

まず「紀事」の梗概を以下に記そう。作品に區切られた箇所はないが、便宜上段落をとって記すことにしたい。

1　三浦一族は源頼朝の召喚に應じて戰に出た。石橋山に向かう途中、丸子河で源氏方の大沼三郎に遇い、頼朝は死んだと聞く。三浦義澄が大沼に尋ねると、道ばたの人に聞いただけだと言う。それを聞いて、和田義盛は流言だとして仲間が自刃しようとするのをやめさせた。義澄は、畠山重忠が軍を進めると聞いて戰わずにすませたいと考えたが、義盛は意氣盛んで承知しなかった。

2　義盛は馬を走らせて畠山の陣の前に行き、大聲で我を止めようと思うなら止めてみよと言った。畠山の軍から答えがなかったことから、義盛は引き返して自分の軍のしんがりに加わる。畠山は、家臣に今彼らが通り過ぎるのを見て一本の矢も發しなかったら、平氏に何もいいわけができないなどと言い、小坪坂で相手に追いついた。畠山の五百騎と和田の二百騎はそれぞれ陣を敷いた。しかし、このあと半澤成清が兩陣の間で血縁關係にある者が殺し合うのは何の益もないと述べ、いったんは互いに退却することになる。

3 ところが、義盛の弟、和田義茂が遅れてやって來る。義盛は側近の者に手を上げさせ、もはや和平したという氣持ちを知らせたが、義茂はまだ幼く、この様子をみて逆に戰いを促しているのだと考え、そのままま敵の後ろ側を攻撃した。畠山は和田が自分をだましたと怒り、先鋒の大串次郎を義茂に向かわせた。義盛は義茂が戰死してしまうことを心配し、坂から下りて陣を張った。義茂は結局和平に氣がつかず、一人で奮闘して敵陣深く入り、都築太郎、次郎、さらに太郎の子までも首を切って鞍につないだ。大聲で畠山に出て來て戰えと言い、畠山は一番前に出て義茂と戰おうとしたが、馬を射られ本田近常、半澤に助けられた。本田、半澤は重ねて和田兄弟に說き、利害を述べて和解を勸めた。義茂は畠山が二人に降伏を願い出ていると思って衣笠に歸り、大介に報告した。

4 大介は、特に義茂の功績を稱えて喜んだ。今後の戰いについて、義盛は衣笠よりも奴田で戰う方が得策だと主張した。しかし大介は、世間から三浦の一族は祖先の地を捨てて奴田の小城で死んだとは言われたくないと言い、自分の言葉はやがて結果として現れると衣笠での戰いを主張して讓らなかった。義盛はやむなく從った。一族は合わせて四百五十人、大介は彼らのために酒食を振るまい、戰いの仕方を授けた。酒食が終わると、大將兵卒が皆鋤や鍬を持ち、家來達と力を合わせて防御の作業をし、一日で工事は終わった。

5 その翌日、畠山重忠には金子、村山、兒玉、横山などが從い。河越重頼には中山、江戸などが從って、兩軍合わせて三千人である。戰いは大介が言った言葉のとおりに進んで敵を退かせたが、金子家忠が三百人を率いて進み柵を次々と破り、三番目の柵の近くにきた。大介は義盛を呼び、一矢で金子を斃させた。夕方、畠山らの軍は退却した。

6 夜、大介は一族を集めて、ひそかに城を出て頼朝公を房總の地に尋ねよ、自分はここに留まって首を敵に授けることで忠報の志を頼朝公に捧げたいと言い、一同は泣く泣くそれに從った。翌日、畠山、河越はやって來て大介が死に裝束で一人で城の中にいるのを見つけた。江戸太郎の家臣豊島次郎が首を斬った。

7　後に源氏が興り、江戸太郎も源氏の家臣となったが、和田、三浦は父の仇を取ろうとはしないと頼朝に言った。他日、藤九郎盛長は義澄になぜ大介が奴田に遷ろうとせず、自分の言葉は後に必ず結果として現れると言ったのかと尋ねた。義澄は自分もようやく大介の意圖が分かったと言い、大介は、子や孫が長く圍まれた城の中にいるのを望んでおらず、衣笠は敵を防ぐには不便だが、圍みを出るには便利であり、奴田はこれと反對で死地であること、大介は城を守ることの最初の段階では、城を出て逃げることを言うわけにはゆかなかったのだと說明した。

以上である。なお、この後には「南城子曰」として南城の所感が附されている。

三　テキスト

この話は『吾妻鏡』（卷一）や延慶本『平家物語』（第二末）、『源平盛衰記』（卷二十一、二十二）などに記されている。[4] 本文を比較してみると、內容が「紀事」と最もよく似ているのは『源平盛衰記』である。しかし、南城がテキストとしたのはそれらではなく、今日僞書とされている『盛長私記』である。それは、既に第七段落にも示したように、「紀事」には「藤九郎盛長、他日義澄に問ひて曰はく」とあり、さらに義澄の言葉のあとに「盛長敬服す」と書かれていることから明らかである。柏崎市立圖書館の三餘堂藏書には『盛長私記』（寫本）も存在しているのである。[5] これによって比較してみると、「紀事」のストーリーは『盛長私記』に沿って書かれていて、內容において兩者に食い違いがない。たとえば、大介の死の場面の書き方である。南城は「江戸太郎の家臣豐島次郎其の首を斬る。」と書いているが、『源平盛衰記』には豐嶋次郎という個人名は記されておらず、延慶本『平家物語』、『吾妻鏡』も同樣である。[6]

實は、「紀事」について考察を始めた當初、筆者は、南城は『源平盛衰記』をテキストにしつつ一部記述を改變して

いると考えていた。しかし改めて考えてみるに、「紀事」とはそもそも史學で言うところの紀事本末體のことで、一事件の顚末をそのまま記すということである。南城がこの作に内容を表すような改まった題名を考えずに、「紀事」としたのは史書の記述を變えることなく事件の經過を記す意圖があったからなのであろう。[7]

さて、『盛長私記』とはどのような書なのか。「藤九郎盛長」とは安達盛長で、源頼朝の側近として信頼が厚かった人物である。『軍記と語り物』の「『盛長私記』輪讀報告」では、「本書は江戸時代を通じて、史書・故實書あるいは讀み物として廣く讀まれたようである。」、「本書は、治承四年（一一八〇）の頼朝擧兵から、嘉祿元年（一二二五）、北條政子の死までを記している。」とある。[8] さらに、「その記述は、骨格を『吾妻鏡』に負うている。というよりも、その大半が、要するに『吾妻鏡』の剽竊であるというべきかもしれない。次いで『源平盛衰記』がよく使われている。輪讀の主要對象とした卷一・二では、『吾妻鏡』に依據した文章の間に『源平盛衰記』の記事を織り込むという手法によって、そのほとんどが成立している様態が、つぶさに推察された。」とある。[9] しかし、筆者の印象は少しこれとは異なる。『盛長私記』の記述は骨格を『吾妻鏡』に負うているというのはそうかもしれないが、ただ『吾妻鏡』の記述は非常に簡素である。[10] これに對して、『源平盛衰記』の描寫は非常に詳しい。だから、「紀事」に關係した部分だけについて言うと、『盛長私記』のほとんどの記述は、『源平盛衰記』に據っているのではないかと感じられるのである。

以下に、「紀事」が據っているのは『盛長私記』のどの部分かを示しておこう。梗概で示した段落を用いて說明する。なお、以下『盛長私記』を引く場合、そのテキストは三餘堂藏書のものを使う。

第一段落は『盛長私記』卷二「俣野與安田志太山軍附三浦逢大沼自丸子川引返事」の後半部と「三浦一族之事[11]」に據っている。第二、第三段落は、小坪の戰いであるが、これは『盛長私記』卷三「相州小坪合戰附和田畠山和平幷小坪戰場之圖之事」、以下第四、五、六、七段落は續く「三浦大介軍評定附衣笠合戰幷衣笠城圖之事」、「大介被討附北條與三浦相逢

并加藤景員父子落足之事」に據っている。[12] ただし、最後の第七段落の部分は、「紀事」の順序で言えば第四段落のあとに、盛長の所感を挿入する形で記されているものである。つまり、第七段落は『盛長私記』の順序どおりではないが、これはいわば後日談であるから「紀事」の方が時間の流れの上からは自然なのである。

四　「紀事」執筆の背景

なぜ南城は「紀事」を書いたのだろうか。『三餘集』は南城の制作した詩文がほぼ年代順に收められているが、その中には小說と考えられる作が十數編ある。その大體は越後各地域の話題であり、內容は奇談が中心である。また南城は、詠史詩を多く作っている。『三餘集』には千八百四十八首の詩があるが、そのうち九％ほどにあたる百七十一首が詠史詩である。そして、南城は今日では珍しい書物として『盛長私記』のほか『先代舊事本紀』なども讀んでいる。[13] さらに、內山氏も述べているが、[14] 南城は白話體も含めた中國の小說も多く讀んでいた。要するに、南城の讀書の範圍は非常に廣く、日本の歷史にも關心を持っていたし、詩文のみならず、小說もその機會があれば書こうという意欲を南城は持っていたのである。

ところで、南城の時代、一般に三浦大介はどのような人物として捉えられていたのであろうか。高橋秀樹氏は『三浦一族の研究』において、「三浦介の傳說は、一族や鎌倉幕府の枠を超え、武門の英雄として中世社會に根附いていくのである。」と言い、さらに「江戶時代には、『三浦大介』の名が藝能や文學を通じてさらに廣まっていく。」として、書名に「三浦大介」を含む作品が多いこと、役者繪にも「三浦助」に扮しているものが多いこと、「三浦の大介百六つ」の傳承も巷閒に流布したことなどを紹介し、「こうして、三浦大介義明は誰もが知る存在になっていた。」と述べている。[15]

つまりは、「長壽の英雄」ということになるであろうか。おそらく南城も、大介という人物に關心を抱きながら『盛長私記』を讀んだのであろう。

五　「紀事」の特色

㈠　明快な人物像

「紀事」における主な登場人物を、三浦方と畠山方とに分けて整理してみよう。三浦方は①和田義盛、②和田義茂、③三浦義澄、④三浦大介などである。畠山方は①畠山重忠、②半澤成清、③本田近常、④金子家忠などである。三浦大介は既に述べたようによく知られた人物であるが、和田義盛、三浦義澄、畠山重忠などもみな歴史上有名な人物である。

和田義盛は、後に侍所別當（さむらいどころべつとう）の職に任ぜられている。[16] 侍所別當とは御家人を統制する組織の長官である。その「勇」については、たとえば『平家物語』巻十一「遠矢」に義盛の遠矢のことが述べられているが、「紀事」でも義盛が金子家忠を射る場面が描かれている。三浦義澄は大介の子で、和田義盛の叔父である。冷靜で畠山との戰を避けようとしている。義澄はその後頼朝のもとで主要な合戰において戰功を立て、頼朝から厚い信頼を得た。畠山重忠は大介の孫であるが、父と伯父が京都にいて平氏に仕えた關係から平氏に味方している、というのが「紀事」の中で畠山が述べていることである。[17] その後重忠は頼朝に歸伏している。貫達人著『畠山重忠』では、畠山を「鎌倉武士の典型と稱される人物」と解説している。[18] 貫氏は、その内容として「豪勇にして武略に富み」以下さまざまな點を擧げているが、和田義盛などと特に違う點は「音曲の才に富んで、風流を解する」點である。

さて、「紀事」の中ではこれら登場人物の擔う役割ははっきりとしている。和田義盛、義茂の兄弟、畠山重忠、金子

家忠は描き方に違いはあるがみな剛勇の者、つわものである。それに對して三浦義澄、半澤成清、本田近常などは冷靜で、できるならば戰いはしないでおきたいと考えている。そうした人物配置の中心にいるのが三浦大介である。

㈡ 起伏のある展開

「紀事」はそう長い話ではないが、テンポ良く話が切り替わり、それでいて全體がよくまとまっている。第一段では、石橋山の合戰に赴こうとする義盛、義澄らの一行と大沼三郎との遭遇の場面から始まり、義盛が義澄の言葉に從わずに戰おうとする樣子が描かれている。

義盛不可曰、畠山尙幼、未習軍事。我兵三百、而彼五百、於敵之何有。歸馬疲矣。將奪而騎彼馬。佐原義連欣然曰、壯哉。吾亦從之。義澄固諫、二子不聽。

（義盛可（き）かずして曰はく、畠山尙ほ幼く、未だ軍事を習はず。我が兵は三百にして、彼は五百、之に敵するに於て何か有らん。歸馬疲れり。將に奪ひて彼の馬に騎らんとすと。佐原義連（よしつら）欣然として曰はく、壯なるかな。吾も亦之に從はんと。義澄固く諫むれど、二子聽かず。）

佐原義連は「紀事」に、大介の末子で「義連今年十五、長大にして勇を好む。義盛と好し。」と紹介されている。『平家物語』巻九「逆落」は、義經が鵯越で平家の陣を破った話であるが、その崖を馬で眞っ先に驅け下ったのが義連である。

第二段、一方の畠山も戰おうとする。その時畠山方の家臣半澤成清が言う。

於是半澤成清陳說于兩陣閒曰、彼此骨肉之親、而各從所奉之主。所遇之節然也。意者源將雖敗走、必將謀再擧矣。吾畠山氏、亦必將有從其命之日矣。今日骨肉相殘、無益。

（是に於て半澤成清兩陣の閒に陳說して曰はく、彼此骨肉の親にして、各〻奉ずる所の主に從ふ。遇ふ所の節然る

なり。意ふに源將敗走すと雖も、必ず將に再擧を謀らんとす。吾が畠山氏も、亦必ず將に其の命に從ふの日有らんとす。今日骨肉相殘するは、益無しと。）

血縁關係にある者が殺し合うのは何の益もないとの説得である。しかも半澤は、やがて畠山も頼朝に仕える日が來るかもしれないとまで言っている。そこでいったん兩軍は退却する。ところが、結局そこに遲れて現れた義茂の勘違いがあり、小坪の戰いが行われる（第三段）。しかし、本田、半澤の仲裁で戰はいったんはおさまる。そして、第四段からは三浦一族の居城衣笠へと場所が變わっている。衣笠の戰いは、小坪の戰いよりもはるかに規模は大きいのであるが、コンパクトな合戰譚としてまとめられている。戰いの前に行われた三浦方での議論も描かれている。衣笠で戰うか、奴田に遷って戰うのがよいか、大介と義盛の口論である。大介は最後に怒って言う。

大介怒曰、義盛汝不知乎。源將敗走、天下皆我敵也。是吾效死之日、恃險何爲。老夫之言、後必有驗焉。汝等猶欲遷于奴田、則老夫獨死于衣笠而已。

（大介怒りて曰はく、義盛汝知らずや。源將敗走して、天下皆我が敵なり。是れ吾が死を效すの日、險を恃んで何をか爲さん。老夫の言、後必ず驗有らん。汝等猶ほ奴田に遷らんと欲せば、則ち老夫獨り衣笠に死するのみと。）

この部分における『盛長私記』の記述は「紀事」よりも長い。『盛長私記』は、「大介腹を立て、汝義盛よ、今は日本を敵に受たり。身を全ふせんと思ふとも運命限りあれば明日を知べからず。縱命は生る共、人の云んするは三浦の輩こそ一旦の命を延んとて、さしも名有者、館の城を遁出て奴田の城にて討れたりと云ん事も口惜しかるべし。」云々と以下長く續いている。南城は、その中で「老者の云事は驗あり。後には思ひ合せんや。」とある箇所を中心に重要な點をまとめたのである。

第六段では戰いから一轉して脱出へと話が變わっている、あれほど強く衣笠での戰いを主張し、今は戰果を收めた直

後であるのに、大介は「防戰の志已に滿てり。」（「紀事」）と言って態度を變え、一族を脱出させている。こうした展開は、讀者に大介のこの言動は豫め考えていたものだと自然に悟らせるような書き方である。

最後の第七段は、大介の「後必ず驗有らん」という言葉の理解を中心とした後日談で話がうまくまとめられているが、それは『盛長私記』を書いている筆者盛長が本文に挿入して記している部分が使われている。

以上のように、南城は『盛長私記』の話を變えてはいないが、細かなところは省きつつ要點を押さえて話をまとめているのである。

㈢　軍記物らしい描寫

a 裝束描寫

南城は話を簡潔にしてはいるが、軍記物らしい描寫は入れている。畠山重忠の裝束の描寫（第三段）を見ておこう。

畠山乃披紺錦戰袍、戴白點星鍪、穿緋紅綴札鎧、袋緣黃金鏤蝶、而佩寶刀薄綠三尺五寸、虎皮鞘之。滿箙鵠羽箭、一張列星畫弓、跨青騅金銀飾鞍、鞅靴垂總紅如火。

（畠山乃ち紺錦の戰袍を披て、白點の星鍪を戴き、緋紅綴札鎧、袋緣黃金鏤蝶を穿て、而して寶刀薄綠三尺五寸を佩び、虎皮之に鞘す。滿箙の鵠羽箭、一張の列星畫弓、青騅の金銀飾の鞍に跨り、鞅靴垂總の紅、火のごとし。）

「白點の星鍪」とは、白星の兜である。「星」とは兜の鋲の突起のことを指し、それを銀で包んだものが白星である。「薄綠」は寶刀の名である。振り假名はすべて南城がカタカナでつけているものである。この部分に該當する『盛長私記』は以下のようである。

其日ノ裝束ハ、紺地ノ錦ノ直垂ニ、緋威ノ鎧蝶ノ下金物打タルヲ着、白星ノ冑ニ二十四サシタル鵠ノ羽ノ箙筈高ニ

取テ附、矢搦矢把子シカトシメ、薄緑ト名附テ三尺五寸ニ幅二寸餘リ、成太刀ニ虎皮ノ尻鞘入テ帯、青芦毛馬ノ太ク逞キ金覆輪、耳ハ白覆輪ノ鞍置、然立ハカリニ見ヘタル紅井ノ厚總ノ鞦掛、武藏鎧ニ紋附タルヲ掛、弓ハ上三十六禽握、下二十八宿ヲ卷タル、重藤ハ上或ハ藤遣ヒタルヲ取テ、歩セイツル。

比較してみると、南城は、『盛長私記』では別々に書かれている「二十四さしたる鵠の羽の箙、筈高に取て附、矢搦矢把子しかとしめ」[19]と「弓は上三十六禽握、下二十八宿を卷たる」の二箇所を、「滿箙鵠羽箭、一張列星畫弓」と對の七字句にまとめている。重忠は「紀事」の中では相手方で、あまり目立つ存在ではないが、實際は有名な武士であるから裝束描寫も立派である。

b　戰闘の中の明るさ

第五段では大介が敵を稱贊する場面がある。三百人を率いた金子家忠は大介が作らせた柵を打ち破り、三つ目の柵に近づいてきた。その鎧には矢が集中して蓑を身につけたかのようである。[20]そして、次のように述べられている。

大介使人提瓶奉觴出謂之曰、觀武藏相模之攻城者、唯卿之勇驚目。今也無乃疲倦乎。請飲之以養勇、則益有壯觀矣。

（大介人をして瓶を提げ觴を奉じ出でて之に謂はしめて曰はく、武藏相模の城を攻むる者を觀るに、唯だ卿の勇のみ目を驚かす。今や乃ち疲倦する無からんや。請ふ之を飲みて以て勇を養はば、則ち益ゝ壯觀有らんと。）

大介は金子の勇氣を譽め、疲れたであろうと酒を與えている。この次には、金子が、酒を飲んでにわかに體が元氣になったので、これからさらに進んで城を抜きたいと答える場面が續いている。前の第三段では、十七歳の義茂が三人の首を斬って鞍につなぐという、通常であれば凄惨と言える場面もあったのであるが、これはそれとは全く反對で、戰いとは思えないのどかなやりとりの場面である。南城は軍記物の特色ある場面はそのまま取り入れている。なお、梗概で示したように金子は義盛の放った矢で斃されたが、深手を負ったものの弟の與市[21]に助けられている。

六　「紀事」の主題

この作には、最後に「南城子曰」が附されていて、南城の所感が記されている。[22] 南城が「紀事」をどのような考えのもとに書いていたのかを考える材料になる。その最初には「和田義盛は古の侠勇の士なり。」とある。この「侠勇」について南城は言う。義盛が義澄の言に従い、敵を避けていれば小坪の戰はなく、衣笠の圍みもなく、大介も死ぬことはなかった。「侠勇の事を敗ること此のごとし」と南城は言いつつ、しかし義盛はこの侠勇によって、頼朝に氣に入られ、侍所別當の職に任ぜられた。當時八州の將士は、多くがどちらに附いたらいいか迷っていた中で、義盛だけが源氏に味方し、小坪や衣笠で大いに腕を振るい、結局このことで頼朝公に氣に入られた。弟の義茂も侠勇の氣があり、かつ鋭敏の才もあった。それに對して、都築太郎やその弟などは、力は強かったが性質は遲鈍で三浦畠山二人を斡旋する才はなかった。要するに和田兄弟は、その資性が皆祖父大介と同類である、と。

この中で、和田兄弟の資性が大介と同類であるというのは少し疑問もあるが、南城は二人の「侠勇」の良い點を見て述べているようである。「紀事」においては、確かに和田兄弟の描寫は多く、この二人を中心に物語は進んでいるようである。しかし、冒頭に大介の死が述べられてあったことや、「資性皆大介に類す」という述べ方、そして、話の最後は大介が述べた「老夫の言、後必ず驗有らん」の理解についてであることからすれば、南城が注目する中心が大介であり、その資質だということは閒違いのないところである。南城に直接の言及はないが、大介が自分の考えを詳しくは言わず、自分は死を選びながら一族を救い、頼朝に力を盡くさせようとした思慮の深さ、その知略に南城は感心しているのであろう。それが、南城が「紀事」を書いた大きな理由ではなかったろうか。知略とか智謀の語は南城は使っていないが、『盛長私記』の中にはある。第七段落の場面で「案ずれは義盛が申せし處一旦近理に叶ふといへども畢竟大介が

智謀には不及」と義澄は語ったので、「盛長得心して則私記に載之」とある。[23] 大介が「老夫の言、後必ず驗有らん。」としか述べなかったのは大介の智謀のゆえである。

七　おわりに

この作品には、歴史上の事件においてしばしばありがちな話がいくつかある。たとえば、自らがおかれた立場に固執することやちょっとした勘違いから争いになっていること、もともとは味方同士なのに戰っていること、そして主の考えで一族の命運が決まっていることなどである。それはみな歴史の教訓となりうるようなものである。

南城は幕末の落ち着かない政治狀況を知っており、櫻田門外の變が起きた二日前に亡くなっている。そこで實際の歴史上の事件として戊辰戰爭が想起される。南城が住んだ柏崎は桑名藩の飛び地領であった。桑名藩は舊幕府軍であるから鯨波の地では戰いも行われた。隣の長岡での戰いは特によく知られている。家老河井繼之助がこの長岡藩の命運を背負った人物である。しかし、「紀事」は天保のころ書かれた作と思われるから、[24] 南城が幕末の動亂を豫見していたと考えるのは無理である。ただし、南城がこの物語の中に歴史の教訓を見ていたということは言えるかもしれない。

筆者は初めてこの作品を讀んでから興味を抱き、八年ほど前には何回か現地調査に出かけた。逗子市立圖書館で資料を閲覽してみると、三浦一族に關する資料は豐富であった。それは當然かもしれないが、研究會があって研究誌が發行され、大會も開かれているなど、當地の方々がいかに三浦一族のことに誇りと關心を持ち、熱心に研究しているかを初めて知ったのであった。もしその方々が、越後の片田舍にこのような作品を書いた儒者がいたことを知ったならきっと驚くことであろう。

注

（1）『三餘集』は新潟縣立圖書館藏。藍澤南城文庫としてデータ公開されている。なお、「南城野史祗艸」の「祗」は南城の名である。

（2）『啜茗談柄』は新潟縣立圖書館の藍澤南城文庫の中にはなく、いくつかの寫本がある。詳しくは、『南城先生の越後奇談ー『啜茗談柄』譯注ー』（郷直人、長谷川潤治、福原國郎、村山敬三　汲古書院・二〇〇一年）を參照されたい。また、『啜茗談柄』は、『日本漢文小説叢刊』（王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也主編・臺灣學生書局・二〇〇三年）第一輯第一卷の最初にも收められている。

（3）内山知也「藍澤南城の漢文小説」は『斯文』（第百七號、一九九九年）所收。

（4）本稿で私用したテキストは、『吾妻鏡』は吉川本『吾妻鏡』（國書刊行會、一九一五年）、延慶本『平家物語』は『延慶本平家物語』（北原保雄・小川榮一編、勉誠社、一九九〇年）、『源平盛衰記』は、『源平盛衰記』（市古貞治等校注・三彌井書店・一九九四年）である。

（5）三餘堂藏書は、南城の私塾三餘堂の藏書。『藍澤氏三餘堂舊藏書目錄　附柏崎市立圖書館藏和漢古書目錄』（斯道文庫論集・第三三輯・一九九九年）があり、そこには「盛長私記　三二卷（文治五年迄）寫薄墨彩色圖入」と記されている。

（6）『源平盛衰記』では、大介は結局「…江戸太郎に斬られにけり」と記されている。また、延慶本『平家物語』では「江戸太郎馳來て、大介が頸をば打てけり。」、『吾妻鏡』では「辰の刻、三浦介義明、［年八十九］河越太郎重頼・江戸太郎重長等が爲に討ち取らる。」となっている。

（7）南城が事實を尊重する態度であることについては、『啜茗談柄』の題言にもそのことが記されている。

（8）『軍記と語り物』は軍記・語り物研究會、一九九二年の發行。その八八から八九頁。

（9）前掲書『軍記と語り物』、八九頁。

（10）たとえば小坪の戰いについては以下のように書かれているだけである。「三浦輩出城來于丸子河邊、自去夜相待曉天、欲參向之處、合戰已敗北之間、慮外馳歸。於其路次由井濱、與畠山次郎重忠數刻挑戰、多々良三郎重春幷郎從石井五郎等殞命。又重忠郎從五十餘騎輩梟首之間、重忠退去。義澄以下又歸三浦。」（前掲書『吾妻鏡』、一五頁。）

（11）『盛長私記』巻二の目錄には「三浦一族之事」となっているが、本文では「三浦一揆之事」と記されている。

（12）『盛長私記』巻三の目錄には「…小坪戰場之圖之事」となっているが、本文では「…小坪軍場圖之事」となっている。同じく巻三の目錄には「大介被討…加藤景員父子落足之事」となっているものが、本文では「大介被討…加藤父子落足之事」となって

いる。

(13) 『三餘集』巻七「尊農篇」に『先代舊事本紀』の引用がある。この書は、大野七三著『先代舊事本紀　訓註』によれば、江戸時代初めまでは『古事記』『日本書紀』同様第一級の古代文獻として重要に取扱われてきたものであるという。

(14) 内山氏前掲論文。

(15) 『三浦一族の研究』は吉川弘文館、二〇一六年。その八二頁、及び八五頁。なお、「三浦の大介百六つ」というのは、詳細はいろいろあるが、大介の長壽を言った言葉である。

(16) 治承四年十一月十七日に侍所別當に任ぜられている。（吉川本『吾妻鏡』巻一）

(17) 「畠山謂家臣本田近常半澤成清曰、我與三浦氏甥舅之親、而同爲源氏之故屬。但以父與伯父在京故、［父重能伯父有重、共從平氏祗役于京］出次于此。」

(18) 貫達人著『畠山重忠』は、吉川弘文館、人物叢書、新装版、一九六二年、その一六八頁。

(19) 「矢把子」は箙に差した矢が亂れないように束ねる緒のことである。「矢搦」も同様のものと思われるが、矢把子との違いははっきりしない。

(20) 「紀事」には「金子猶進近于三柵。箭集于鎧、如蓑毛。」とある。

(21) 『源平盛衰記』では「與一」としている。

(22) 原文は以下のとおり。「南城子曰、和田義盛古之俠勇士也。當時從義澄言、閑行避敵、則無小坪之戰。無小坪之戰、則無衣笠之圍。無衣笠之圍、則大介不死敵手。是所謂不自我始禍、臨事而懼者之所爲也。義盛嫌其似示弱于人、不敢從義澄言。於是乎有小坪之戰矣。有衣笠之圍矣。而大介遂死敵手矣。俠勇之敗事如此。然而義盛以此俠勇、取媚于源大將、任于侍所別當之職。當時同僚、皆立其下風、何也。蓋源氏唱義之初、八州之將士、多持模稜之手。況於源將敗軍狼狽之際乎。義盛獨左袒源氏、大奮臂于小坪于衣笠、使首鼠于赤白二幟閒者、皆刮目焉。是其所以取媚于源大將也。其弟義茂、筋骨未堅、而擊三力士。亦其俠勇之氣、加之以鋭敏之才、非偶有天幸而然也。都築太郎、力兼數十人。其於角力戲也、八州無敵。其弟其子、亦皆以多力稱。而其質遲鈍、無斡旋之才、所以招死也。要之和田兄弟、資性皆類于祖父大介矣、大介大稱揚二孫之俠勇而自甘心于獨死敵手矣。則其祖孫同志可見焉。詩云、惟其有之、是以似之。」

(23) ただし、「智謀」の語は、『盛長私記』の中でほかにも「義經の智謀」などと使われており、この箇所に限った使われ方ではない。

(24) 『三餘集』は收められた作品の内容から、各巻の成立年代を概ね推測できる。「紀事」は『三餘集』巻四にあるが、巻四は天保

十（一八三九）年から十二（一八四一）年までの作を收められていると考えられる。

［附記］　調査にあたって柏崎市立圖書館に大變お世話になりました。心より御禮申し上げます。